

2021年9月5日 聖餐式説教

私たちは本年礼拝の福音書で、マルコによる福音書を中心に学びを続けておりますが、マルコによる福音書によれば比較的早い時期から主イエスの回りには大勢の人びとが集まるようになっていたようです。様々な教えや奇跡が行われ、人びとの関心は主イエスに集まってきました。主イエスと弟子たちはもはや食事をする暇もないほど大勢の人たちに取り囲まれていたと記されております。本日の福音書の箇所もそうしたある日の出来事のようなようです。

人びとは、耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来ました。そこには主イエスなら治してくださるであろうという信頼があったにちがいません。主はその願いをかなえられたのでした。このエツファタ「開け」という言葉は本日の福音書の中で大変重要な言葉です。

教会の教えは、あれをしてはいけません、これをしてはいけません、とあれこれ制限をして我慢を押しつけるものではありません。教会の教えは自由になること、本当に自分が自分らしく生きることを大切にすることなのです。主イエスは本日の聖書の箇所で、この口がきけず、耳の聞こえない人の苦しみを取り去り、自由に耳が聞こえ、言葉を話すことが出来るようにされたのでした。この人の不自由さを、主イエスが解放されたのでした。そのことがよく現されております。

さて、本日礼拝に来ておられる方は本日の聖書の箇所をどう思われたでしょうか。わたしは耳も聞こえるし、口も自由だから人の話としては分かるが自分とは関係のない話だと思われるかもしれません。しかしちょっと考えてみましょう。私たちは耳が聞こえると思っています。たしかにそのとおりです。しかし聞く必要のあることにいつも耳を傾け、聞かなくていいことは聞こえないようにしているのでしょうか。むしろ逆で、聞かなくてはいならないことを聞き逃し、聞かなくてよいような人のうわさ話や、人の秘密にはじっと耳を傾ける。私たちは意外とそういうことが多いのではないのでしょうか。これで私たちの耳は自由だと言うことが出来るのでしょうか。口はもっとはっきりしています。しゃべってからあんなこと言わなければよかった、少し言い過ぎてしまった…。とあとで反省することは、私たちにはしょっちゅうあることです。耳以上に私たちは話すことで失敗することが多いのです。私たちは耳がよく聞こえ、別に何も考えず話しておりますが、自分の耳と口を振り返ってみるとき、決して自由

だとは言えない、不自由さが自分の中にあるのに気づかされるのです。

主イエスはそういう私たちに対しても、「開け」と言っておられるのです。後で後悔するような、人を傷つけてしまうような耳や口から解放され、正しく生きる者となりなさいと言っているのです。これは私たちにとって大変難しいことではありますが、一生かかってでも取り組むべき重要なことなのです。主イエスはその手本と約束をお示しになられたのでした。

もう一つ重要なことは、教会は自由になっていくところだということです。これは自分の中にある不自由さから解放されていくところ、それが教会であり、教会の群れは、自分自身の不自由さに取り組んでいる人びとの集まりなのです。自由とは単に、何でもかんでも、よいことでも悪いことでもしてよいということではありません。自由には責任が伴います。自分の不自由さから解放されたならば、今度は自分自身で正しく生きて行く責任が伴うのです。私たちを不自由に縛り付けようとする悪魔の誘惑、責任よりも不自由な方がよいと考える、いわば罪の奴隷のような生き方、主はそこから私たちに「開け」と言っておられたのです。自由になりなさい、そして自分の意思で正しく生きていきなさい。これが本日の聖書の私たちに対するメッセージです。若い人もご年輩の方も、自分自身の持つ不自由さを見つめて、主イエスの開けの言葉に従っていきましょう。